

# 労働価値論の思想と論理－アダム・スミスの遺産

The Thought and Logic of the Labour Theory of Value : Achievements of Adam Smith

奥山忠信

OKUYAMA, Tadanobu

## 要旨

本稿では、今日通説となっている需要曲線と供給曲線における限界効用理論と限界費用曲線に関する問題を提起し、これに代わるものとして、アダム・スミスの考察を中心に、古典派労働価値論の意義を再確認する。特に、スミスの投下労働と支配労働の関係については、リカードウに代表されるようにスミス価値論の混乱として受け止められてきた。しかし、本稿では、支配労働価値説は投下労働価値説を前提としており、労働価値論と生産費説とをつなぐ論理となっていることを考証している。すなわち、スミスにとっては、支配労働価値説が分業社会での等労働量交換の考え方の根拠となっていること、その上で投下労働と支配労働の乖離が生じる資本家・労働者・地主の経済システムの下では、個別的な商品の等労働量交換は成立しないが、賃金・利潤・地代のそれぞれが支配労働によって尺度される点で労働価値論が貫かれていること、支配労働と投下労働の差が余剰として利潤と地代の根拠になっていることを論じ、スミスは労働価値論を前提とした生産費説の論者であったことを説いている。

## Keyword

需要曲線、供給曲線、アダム・スミス、労働価値説、生産費説  
demand curve, supply curve, Adam Smith, labour theory of value, cost theory of value

## 序言

本稿の課題は、アダム・スミスの労働価値論の思想と論理を考察することにある。労働価値論は、現在の経済学においては異端派である。しかし、本稿は、今日の経済学の説く価値論に強い疑問を持っている。1870年代のいわゆる限界効用理論の登場によって、現在の経済学においては、需要曲線も供給曲線も、限界理論に適合するように作られている。しかし、実体経済を考慮すると、むしろ、労働価値論や生産費説をベースとした古典派の価値論の方が現実性を持っているのではないか、

とすることである。

主流派の経済学は、伝統的に縦軸に価格、横軸に需要量および供給量を取り、一般的な商品については、需要曲線を右下がりに、供給曲線を右上がりに描く。限界理論では、限界効用逓減の法則が需要曲線の右下がりの根拠となり、他方、限界生産費が下に凸（U字型）を描き、操業停止点より右側の費用逓増部分が供給曲線の右上がりの根拠となる。

しかし、仮に限界効用の逓減が正しいと仮定しても、これは消費の特定の場面での話であり、10本の缶ビールを買って、これを連続的に休みなく消費した場合を理論化したもの

である。しかし、需要は消費と密接に関係するとしても、直接には購入に関わる問題である。購入者が同じように10本の缶ビールを買ったとしても、これを家族や仲間10人で1本ずつ飲む場合や、自分一人で1日に1本ずつ10日間飲む場合もある。あるいは1本しか買わない場合には、限界効用逡減の法則は関係がない。

仮に購買者が購入に際して頭の中で連続的消費をイメージしたとしても、購買の際にイメージの中だけで限界効用逡減の法則が本当に作用するのであろうか。消費する前に限界効用が逡減するのは不自然である。消費の局面と購買の局面とは別である、と考えるのが妥当ではなかろうか。

また、供給曲線は、右上がりのなだらかな曲線で描かれ、この基礎となっているのが、限界費用の考え方である。限界費用は下に凸のU字型で描かれる。固定資本の存在によって、まず限界費用が逡減し、生産の最適規模を超えると逡増すると考える。この逡増局面の内の操業停止点より右側が、供給曲線の右上がりに対応すると説かれる。

一般に完全競争の想定では、価格は所与と前提される。しかし、現実の企業は、常に競争の中に置かれ、企業は、他社との差別化を図るために、価格が同じならば品質で、品質が同じならば価格で勝負をかける。特に価格は、完全競争の下でも企業の重要な戦略である。この競争状態を前提に、固定資本は導入されるので、固定資本の非効率的な使用法は、企業は採用しない。

マルクス (Karl Marx, 1818-1883) の『資本論』(Das Kapital, Marx [1971]) に登場する資本家の行動は限界理論とは異なる。固定資本、つまり機械の価値は減価償却的に少

しずつ商品に移転され、価格形成に参加すると考える。固定資本の耐用期間とその間の予定された生産量に依存して計算され、個々の商品の価値の中に入り込む。適正規模を超えて作り続けて限界費用を無限に逡増させることはない。生産は常に適正規模で行われ、固定資本も含めて適正規模を維持するように拡大される。言うまでもないが、原料や労働力などの可変費用は、単位商品あたり同一である。1個目と2個目で限界費用が変わることはない。したがって、一定の技術の下では一定の生産費が計上され、供給価格は一定となる。

しかし、U字型の限界費用関数を描く資本家は、生産量を考えずに資本を投下する。そして、限界費用の左端では、例えば100万円の機械を購入してパンを1個しか作らない。また、費用の逡増局面では、固定資本を増加することなしに、無限に生産量を増やしていく。機械を1台増やせばより効率的に生産ができるにもかかわらず、限界費用を無限に逡増させる。

限界費用が増大しても機械を購入しないという想定は、経済学者が作り出した想定である。ここには、短期においては固定資本を追加投入しないというルールがある。これは企業家のルールというよりも、経済学者の作り出したルールである。短期か長期かは期間の長さの問題ではなく、固定資本を追加するかどうかの問題である。固定資本を追加するかどうかで、1年は長期にも短期にもなる。資本家がこのような分析をする理由は見当たらない。

固定資本の問題は、減価償却的にも処理できるし、土地や建物やコピー機などのようにリースの可能な固定資本もあり、固定資本の

処理の仕方は多様にある。しかし、経済学の費用関数はこうした想定を認めないことで成り立つ。そして、固定資本の存在が描き出す曲線は、微分に適しているように描かれる。

一定の固定資本に対して最も効率的な生産規模に関する計算は、工場内では行われるであろう。その場合に限界費用曲線を描くことも考えられる。しかし、それは企業の供給曲線とは別である。企業は常に固定資本の増加も含めた最も有利な技術的組み合わせで生産を継続し拡大する。固定資本を追加しないと、いう短期のルールで限界費用曲線を描き、ここから企業の供給曲線を導くことの不自然さは否めない。

古典派経済学の供給曲線は、市場価格は需給関係で変動するが、自然価格に関して言えば、供給量に関わらず価格は一定である。需要量によって変化することはない。需要曲線がどのようにシフトしても、生産費によって自然価格は規定される。

資本は、価格が上がったから供給量を増やすのではなく、利潤量や利潤率を基準に供給量を増やしたり、破綻したり、他部門に移動したりする。このシンプルな理論が、最も現実に適合しているのではなからうか。

後に見るように、生産費説を労働価値論から導いた経済学者が、アダム・スミス (Adam Smit, 1723-1790) である。労働価値論の基本的な考え方のほとんどが『国富論』(Smith [1981]、初版1776) に埋め込まれており、今日の価値論を再考する上での貴重な遺産となっている。

特に、本稿は、スミス価値論の混乱を示すと言われている投下労働と支配労働の関係、および価値分解説と価値構成説の関係を労働価値論との関係で考察する。

## I アダム・スミスの労働価値論

### 1. 分業と価値

アダム・スミスの労働価値論の最も基本的な問題は、投下労働と支配労働の問題にある。経済学説史上の論争は、この問題をめぐって行われている (渡辺 [2010]、参照)。この問題を深刻化させたのは、リカードウ (David Ricardo, 1772-1823) である。

リカードウは、アダム・スミスは支配労働と投下労働の2つの基準の下に価値論・価値尺度論を展開するという混乱をもたらしたとして批判する。(奥山 [2013a]、参照)。結論として、リカードウは、アダム・スミスの投下労働を堅持し、支配労働を捨てることになる。こうしたスミス解釈は、リカードウだけではなく、マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) も J.S. ミル (John Stuart Mill, 1805-1873) も同様の解釈を行っている。後者は、リカードウとは逆の道を取り、支配労働を継承する。

経済学の父アダム・スミスの価値論が、その後継者たちを二分したこともまた、スミス価値論の混乱を深く印象づける。しかし、スミス価値論は混乱していたわけではない (馬渡 [1997a]、島 [1980]、参照)。そもそも、支配労働は投下労働を前提としなければ成り立たない概念であった。

スミス価値論は、分業論と密接に関わっている。スミスは『国富論』第4章「貨幣の起源と使用について」の中で、分業と交換の行われている商業社会では人々は多かれ少なかれ商人的な性格を帯びること、慈愛による贈与によって欲しいものを得るよりも、相互の利己心を刺激して互いに自分の欲するものを獲得する点で、交換は人間の本性に根差し

ていること、分業も交換も人間の英知の産物ではなく、人間の本性の顕現であること、を説く。

物々交換には相互需要の不一致という困難が伴う。自分が欲しいと思っている商品の所有者が、自分が持っている商品を欲するとは限らない。この困難を解決するために、人々に広く受け入れられる商品をいったん手元に保有しておく必要がある。

スミスの場合、手元に置く貨幣は富として蓄えられるわけではないが、購買手段として用いるために、一時的に手元で価値を保存することになる。この点では、スミスの場合、貨幣を交換の道具とみなすとしても、価値の保蔵の機能を無視しているわけではない。重商主義のように、富としての価値保存機能を説いているわけではないが、貨幣が交換の道具として機能するためには、手元に置いておく必要があり、その限りでは、スミスの場合、価値保蔵手段の機能は含まれていると考えられる。

ともあれ、たとえ自分が欲する商品ではなくとも、広く多くの人に受容される商品と交換し、その後でこの市場性を持つ商品によって自分の欲する商品を購入するという回り道が、結果的に交換を容易にするのである。このような一般的な受容性を持つ商品が貨幣である。

貨幣は、スミスにとっては、商業社会あるいは文明国の普遍的な「商業の道具」(Smith [1981], p.44, 訳60頁)として定義される。このスミスの貨幣=道具説には、ヒューム(David Hume, 1711-1776)同様に、貨幣を「富」とする重商主義に対する批判の意味が込められている。

スミスにとっての富は、貨幣ではなく労働

生産物であり、この見解もヒュームと共通する。しかし、ヒュームとスミスの貨幣論の類似はここまでであり、ヒュームが完成させたと言われる貨幣数量説は、スミスにとっては批判の対象である。この点で、スミスを貨幣数量説に数えるリカードウなどの見解は、誤読である(奥山 [2011a, b])。

貨幣を論じた『国富論』第4章の最後に、スミスは、第5章以降の価値論を展望する。労働生産物の交換には自然に守られるルールがあり、このルールが商品の相対的価値あるいは交換価値を決定すると言う。そして、この法則の研究が『国富論』の価値論の課題であると言う。

スミスが労働価値論の中に見た自然のルールとは何か。まず、スミスは価値を2つの意味に分ける。第1に使用価値(value in use)であり、第2に交換価値(value in exchange)である。使用価値は、使用に際しての有用性(utility)であり、交換価値は、財の所有を譲渡して他の財を購入する力である(*Ibid.*, p.44, 訳60頁)。

財を購入する力とは、商品の購買力である。商品の購買力はどこから来るか。スミスは、いわゆる水とダイヤモンド問題に言及する。水ほど有用なものはないのに交換価値を持たず、ダイヤモンドは使用価値を持たないのに高い交換価値を持つ。これがいわゆる水とダイヤモンド問題である。

スミスの説明には、ダイヤモンドに高い使用価値を認める人がたくさんいるではないか、という批判がある(例えば、Mill [1965])。しかし、高い使用価値と労働価値論は、スミスにとっては矛盾しない。ダイヤモンドの希少性や美しさは、スミスにとっては、その使用価値が価値を持つのではなく、この特殊な

使用価値の故に人々が獲得するための困難を厭わない、ということに裏づけられているのである。希少性や審美性は、より多くの労働に裏づけられて、高い価値を持つのである。

この説明は『国富論』第1編第11章の地代論の中に含まれている。以下のようなようである。

「宝石に対する需要は、すべてその美しさから生じる。宝石は装飾品としてのほかは何の役にも立たない。またその美しさと言う値打ちはその希少性によって、つまり鉱山から取得する時の困難さと費用によって、大いに高められる。」(Smith [1981], p.191, 訳302頁)

ダイヤモンドが使用価値を持たない、ということの意味は、装飾品としてしか役に立たない、言い換えれば、衣食住のレベルの人間生活には役に立たない、という意味である。美しさの持つ使用価値を否定していたわけではない。

その上で、希少であるが故に価値を持つわけではない、と考えている。財宝のような希少な財については、どんなに労働を追加しても獲得したいということが価値を決定すると考えているのである。すなわち、希少財は希少であるが故により多くの労働に値する、という意味で、労働価値論の適用例となっていたのである。

## 2. 尺度論としての価値論

スミスは、第5章のタイトルを「商品の真の価格と名目価格について、すなわちその労働による価格と貨幣による価格について (Of the real and nominal Price of Commodities, or of their Price in Labour, and their Price in Money)」(Ibid., p.47, 訳63頁)と付す。このタイトルの中に、スミスの答えは表現さ

れている。つまり、真の価格は労働によって表現された価格であり、名目的な価格が貨幣によって表現された価格である。

また、不変尺度論争は、当時の大きな論争であり、商品の価値にも長さや重さや角度のような不変の価値尺度が求められていた。不変尺度論争に対するスミスの回答が、「労働」と言うことになる。

とは言え、労働は人間によって担われる。スミスが考察しているように、1時間の辛い労働と2時間の楽な労働では、本当は1時間の辛い労働の方が多くの労働を含んでいるかもしれない。また、創意工夫や訓練の間も単純には評価できない。しかし、スミスは、こうした問題も、正確ではないが、「市場での交渉や取引 (the higgling and bargaining of the market)」(Ibid., p.49, 訳65頁)によって調整され、通常のビジネスにおいては問題ない、と言う。市場が異質な労働の問題を大まかに調整すると考えている。

そして、「等しい労働の量は、いつでもどこでも労働者にとっては等しい価値であろう」(Ibid., p.50, 訳68頁)と言い、健康と体力と気力、そして熟練度が普通であれば、という条件を付ける。こうした労働の平均化は、分業の進展による労働の単純化が根拠になっていたものと考えられる。労働は互いに同質なものに還元可能であり、労働量と価値との比例関係を保つ状況にあると考えられていたものと思われる。

## 3. 投下労働と支配労働

投下労働は商品を生産するのに必要な労働を指し、分かりやすい概念であるが、支配労働の概念は単純ではない。スミスの支配労働は、分業と交換の社会において特別な意味を

持つ概念である。

スミスによれば、自給自足的な社会であれば、自分の労働で自分の必要なものを生産し消費する。その人が豊かか貧しいかはその人の労働に依存する。しかし、分業と交換の支配的な社会では、自分の必要な生産物のほとんどを他人が生産する。本来自分がなすべき労働を他人が行う。このことが交換のルールとしての労働価値論に結びつく。

スミスは、分業と交換の社会では、自分がどれだけの労働を行ったかが、どれだけの生産物を獲得するかを決めるわけではない、と考える。投下労働は交換の経済においては富裕の尺度ではない。自分の労働そのものではなく、自分の労働が他人によってどのように評価されるかが重要である。これが支配労働である。スミスは次のように言う。

「すべての商品の価値は、…これを他の商品と交換しようとしている人にとっては、彼が購買 (purchase) あるいは支配 (command) することのできる労働の量に等しい。」(Ibid., p.47, 訳63頁)

交換される商品の中には、一般的な商品もあるが労働力も入っている。このことは、「すべての商品は、労働とよりも他の商品と交換され、比較されることの方が多い」(Ibid., p.49, 訳64頁)、という文言からも明らかである。

投下労働の概念は次のように登場する。

「あらゆるものの実質価格、すなわちあらゆるものがそれを獲得したいと思う人に真に負担させるのは、それを獲得するための労苦 (toil and trouble) である。」(Ibid., p.47, 訳63頁)

toil は骨を折って働くことを意味し、toiler は賃金労働者である。また trouble も

労苦をさすので、2語まとめて「労苦」と訳す。いずれにしても、労働の負担 (cost) が「実質価格 (real price)」なのである。これが投下労働である。

他方、支配労働は、既に自分の労働によって物を獲得し、他の物と交換しようとする人にとって真に価値あるもの (really worth) として説かれている。それは「彼自身の労働を節約でき、また他人に課することができる労苦 (toil and trouble)」(Ibid., 同前)、として説明されている。自分の労働を節約できるものとは、交換する相手方の商品の生産に必要な労働である。これに対し他人に課す (支配する) ことのできる労働とは、労働者の労働時間そのものである。後に見るように、資本家と地主のいない初期未開の社会では、投下労働と支配労働は一致する。したがって、節約された労働と支配できる労働時間そのものも一致する。

こうした説明の後で、スミスは労働を「本源的な購買貨幣 (original purchase-money)」(Ibid., p.48, 訳64頁) である、と言う。労働によってしか何物も得られないという趣旨である。

貨幣や自分の持っている商品で他の商品を得る場合は、それらのものは一定量の価値を含んでおり、互いに他の商品を作るための労働を節約したことになるので、「等しい量の価値を含んでいる (contain) と思われるもの」(Ibid., p.48, 訳64頁) に対して交換を求めることになる、と考えられている。

等労働量交換の根拠は、交換によって互いに自分の労働を節約することにあると言える。労働どうしの等労働量交換は、自分が行った場合の労働を節約するのである。これが、スミスが第4章で予告していた交換の自然の

ルールであろう。

「世界のすべての富がもともと購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってであり、したがってその価値はそれを所有し、それによって何か新しいものと交換する人にとっては、それらが購買あるいは支配することができる労働量と正確に等しいのである。」(Ibid., p.48, 訳64頁)

先に述べたように、労働はさまざまであり、単純に比較できない労働も数多くある。しかし、これらの相違は市場で大まかに調整され、日常的な活動には問題は生じない、とスミスは考える。

投下労働と支配労働の現実的な関係については、スミスは貴金属を事例に説明している。すなわち、16世紀の価格革命、スミスによればヨーロッパの金銀の価値が3分の1に引き下げられた経済的な事件は、南米の豊かな鉱山の発見による。すなわち、新大陸の金山や銀山は豊度が高いために、より少ない労働で鉱山から市場に運ぶことができ、それ故により少ない労働しか購買あるいは支配することができなくなった、というのである(Ibid., p.49, 訳67頁)。新鉱山の投下労働の減少が支配労働の減少につながって、ヨーロッパの物価を3倍に押し上げる大事件が起きた、という訳である。

言うまでもなく、ロック(John Locke, 1632-1704)、モンテスキュー(Charles de Secondat, Baron de Montesquieu, 1689-1755)、ヒューム(David Hume, 1711-1776)に代表される貨幣数量説は、貨幣の内在的な価値を否定して、中南米から流入する金銀の量そのものの増加が、金や銀の貨幣価値を下げた、と説く。貨幣数量説は貨幣量の増加が物価を上げたと言いが、スミスは支配労働の

下落による貨幣価値の下落が物価を上げた、と説くのである。スミスの労働価値論は、明確な貨幣数量説批判になっている。労働価値論が、スミスと貨幣数量説を分けたのである。

ところで、あらかじめ示しておいたように、第5章は、商品の実質価格と名目価格を論じる章である。それは、実質価格が労働による価格(price in labour)であり、名目価格が貨幣による価格(price in money)であることを示すものであった。

金や銀の貨幣のように、それ自体の価値が絶えず変動している貨幣は、正確な尺度とはなり得ない。これに対し、体力と気力と熟練度が普通であれば、等しい量の労働は、いつでもどこでも労働者にとっては等しい価値と言ってよいであろう(Ibid., p.50, 訳68頁)、と言う。労働は互いに同質のものに還元可能であり、相互に比較可能になっていると考えられているのである。

そして、労働者の労働はいつも同じであるが、労働者の入手する商品は変動する。しかし、それは商品の価値が変動するのであって、労働の価値が変動するわけではないことを確認した上で次のように言う。

「いつでもどこでも、手に入れるのが困難なもの、多くの労働を要する物は値段が高く、容易に非常に少ない労働で獲得できるものは、値段が安い。」(Ibid., pp.50-51, 訳68頁)

労働と商品の価値とは比例関係にある、と考えられているのである。この見解は、投下労働価値説の見解であり、これを前提に支配労働が尺度単位として選ばれるのである。

また、労働は同じ量の「安楽(ease)、自由(liberty)、幸福(happiness)」(Ibid., p.50, 訳68頁)の放棄である、と考えられている。労働が苦痛であることが、労働が価値を生み、

賃金が支払われる理由となっている。

支配労働という真実尺度があるにもかかわらず、貨幣という名目尺度が必要となる理由をスミスは次のように説明する。

第1に、実際には「異なる労働の比を尺度するのは困難である」(*Ibid.*, p.46, 訳65頁)こと、第2に、商品は労働と交換されるよりは、商品と交換されることが多いこと、をあげる(*Ibid.*, 同前)。

このために、労働の量よりも他の特定の商品の量で交換価値を評価する方が自然であり、大多数の人にとっても理解しやすい、と言う。

「一方(商品や貨幣…奥山)は、手でつかめるわかりやすい対象物であり、他方(労働…奥山)は抽象的概念(*abstract notion*)であって、十分に理解できるとしても自然で明白だとは言えないのである。」(*Ibid.*, p.49, 訳66頁)

スミスにとっての労働価値論は、不変の真実の尺度で理論的に理解可能なものではあっても、現実的な尺度財ではなかったのである。

以上の意味で、スミスは、支配労働を真実の尺度、貨幣による尺度を名目的尺度とする。

## II 労働価値論と自然価格論

### 1. 問題の所在

アダム・スミスの労働価値論のもうひとつの問題は、いわゆる価値分解説と価値構成説の問題である。価値分解説とは、商品の価値は労働によって作られ、労働によって作られた価値が、賃金、利潤、地代に分解される、とする見解である。これに対し価値構成説とは、商品価値は、賃金、利潤、地代の合計によって成り立つ、とする見解である。

この2つの見解が対立関係に入るのは、リカードウの賃金・利潤相反説による。リカー

ドウは、労働価値論を投下労働価値説で一貫させることによって、賃金と利潤の相関関係を導く。価値構成説のように、商品の価値が賃金と利潤と地代の合計したものであるとすると、賃金が上がれば、商品の価格が上がることになる。商品価値は労働によって作られ、これが賃金と利潤と地代に分解される、とする分解説をとるならば、賃金・利潤相反説が導かれることになる。スミスは、この2つの理論を『国富論』の中で併存させているのではないか、という問題である。そして、仮に価値構成説の方に重心があったとすれば、スミスは労働価値論から離れていたのではないか、という問題にもつながる。

リカードウの『経済学および課税の原理』(初版1817、第3版1821、Ricardo [1951]、以下、『原理』、と略記)の「第1章 価値について」の第1節のタイトルは、次のようなものである。

「1商品の価値、すなわち、この商品と交換される何か他の商品の分量は、その生産に必要な労働の相対量に依存するのであって、その労働に対して支払われる報酬の多少には依存しない。」(Ricardo [1951], p.11, 訳13頁)

商品の価値が労働によって決まる以上、賃金と利潤は、労働によって決定された価値を前提にした分配の問題であり、賃金や利潤の変化が商品の価値を変えることはない、と考えているのである。

リカードウは、労働時間の相対比をとる労働価値論を主張するが、サミュエル・ベイリー(Samuel Bailey, 1791-1870)が批判するように(Bailey [1967], 初出1825)、リカードウの相対価値論は、商品の物的な交換比率としての交換価値を指すのではなく、労

働量の相対比としての交換価値であり、それぞれの商品の生産に必要な投下労働時間を前提にした相対価値論である。

したがって、単純化すれば、パン1個が100円なのは、例えばそれが1時間労働の生産物であることによる。この内、賃金部分が70円、利潤部分が30円であったとする。賃金部分が労働に対する需給関係や生活資料の価格の変化により、60円から70円に騰貴したとすれば、価値分解説では、利潤は40円から30円に減少する。逆に、賃金部分が60円から50円に下落したとすれば、利潤部分は40円から50円に上昇する。労働価値論からの必然的な帰結として、賃金・利潤相反説が導かれる、とリカードは考える。

もちろん、リカードはこの見解に条件を付けている。リカードの『原理』第4章「自然価格と市場価格」の冒頭では、現実の市場価格は労働価値論をそのまま反映するものではないこと、労働価値論は古典派の均衡価格である自然価格論においてであることを明記している。

また、マルクスが指摘するように、利潤率は、現実には一定の期間に対する利潤率である。単一商品当たりの利潤率は、企業にとっても経済学にとっても分析の対象ではあるが、現実的には期間利潤率が問題となる。この期間利潤率の立場に立てば、仮に賃金が上がって、他に商品あたりの利潤率が下がったとしても、商品の販売量が増え、資本の回転が早まれば、利潤量も利潤率も上がる。労働価値論を採用したとしても、賃金・利潤相反説は傾向法則であり、常に成立するとは限らない。

## 2. 価値分解説と価値構成説

この問題は、投下労働と支配労働の問題と

密接に重なっている。「第6章 商品の価格の構成部分について」においては、資本と土地の占有に先立つ初期未開の社会、すなわち資本家も地主もない社会が想定され、ここにおいては投下労働と支配労働が一致することが説かれる。ビーバーと鹿の交換事例において、ビーバーを捕獲するのに鹿を捕獲する際の2倍の労働が費やされるとすれば、1頭のビーバーは2頭の鹿と交換されると説く。物の獲得に必要な労働量だけが、交換の基準としての唯一の事情だからである (Smith [1981], p.65, 訳92頁)。

資本が登場すると事情は大きく異なる。資本家は、利潤を得るために原料を買い、労働者を雇うようになる。この結果「労働者が原料に付け加えた価値は、この場合(資本家と労働者だけの場合…奥山)には2つの部分に分解 (resolve) される。一方は労働者の賃金支払いに、他方は雇い主が前払いした原料の資財と賃金の全体に対する利潤の支払に充てられる」(Ibid., p.66, 訳92頁)。

つまり、労働者が新たに作り出した価値は、賃金と利潤に分解されるのである。この見解は、明らかに、価値は労働によって作られ、それが賃金と利潤に分解されるとする見解であり、労働価値論に即した見解である。

利潤の登場は、交換の基準を変える。労働だけが唯一の交換の事情ではなくなる。それは、資本家の監督 (inspection) や指揮 (direction) は、労働者の労働とは全く異なるからである。したがって、利潤は労働の量には比例しないのである (Ibid., p.66, 93頁)。監督労働や指揮労働は、利潤がどれだけ違っていても、実際には同じようなものである、とスミスは言う (Ibid., p.66, 94頁)。資本の所有者が投下資本に期待するものは、

一定の比率の利潤である。商品の価格の内、利潤は賃金とは全く別の原理を持っているのである。

同様に、土地の私有が行われるようになると、土地の生産物には地代が要求されるようになる。地代は地主の労働ではなく、土地の豊度や位置による。これが賃金と利潤に続く第3の構成要素となる。

商品の価格が3つの構成要素からなるということは、労働価値論の放棄ではない。スミスは、このことを次のように確認する。

「認識しておかなければならないことは、価格のさまざまな構成要素のすべての実質的な価値は、それらがおのおの購買あるいは支配することのできる労働量によって測られるということである。労働は、価格の中の労働に分解する部分を測るだけではなく、土地に分解する部分、利潤に分解する部分も測る。」

(*Ibid.*, p.68, 95頁)

スミスの場合、商品の構成部分としての賃金も利潤も地代も、それぞれが支配労働によって測られる、ということによって、労働価値論が維持されているのである。

この場合、留意すべき点がある。まず、価格の構成部分としての道具や原料が、スミスの場合、構成要素から落ちていることである。しかし、スミスはこれらの要素もまた遡及すれば賃金と利潤と地代に分解される、と考える (*Ibid.*, p.68, 96頁)。

マルクスはこれを  $v+m$  のドグマと呼ぶ (『資本論』、第2部第3篇第19章第2節「アダム・スミス」、Marx [1971], S.362-388, 訳第7分冊、574-623頁、参照)。生産手段部分が消えて、賃金部分 (可変資本  $v$ ) と剰余価値 ( $m$ ) だけが商品価格になってしまう、ということである。これは生産手段部分も、過

去には労働者の生きた労働によって作られたものであり、賃金や利潤のように新たに付加された価値とは同じ労働の産物であることを論じたものである。

もちろん、資本家が資本として投下するものが労働者の賃金だけになってしまうだけではない。もしそうであるとすれば、価格は労働者の労働に比例することになる。資本の求める利潤が労働と比例しないということの意味は、先の引用部でスミスが説明しているように、資本家が投下資本に対する均等の利潤率を求めるためであり、生産手段と賃金も含めての資本に対する均等利潤率を求めるから生じることである。この点では、生産手段の存在はスミスにとって重要な意味を持っており、看過されているわけではない。

また、地代と利潤が価格の中に含まれるようになると、投下労働と支配労働の間に乖離が生じる。利潤や地代が価格の構成要素になると、「年々の労働の生産物は、その労働の生産物を栽培し、作り、市場に運ぶよりもはるかに多くの労働量を購入あるいは支配するのに十分になるだろう (*Ibid.*, p.71, 訳201頁)」、と言う。

単純化された事例で、生活資料をパンだけと考える。例えば、労働者が1日に10時間労働して、10個のパンを作ったとする。この内、労働者は8個のパンを消費すれば1日の生活が成り立つとしよう。8個のパンの投下労働時間は、8時間である。資本家は、8時間労働のパンで、労働者の10時間の労働を支配したことになる。10時間から8時間を引いた2時間部分が余剰であり、これが利潤の源泉となる。労働者の10時間労働は、10時間の等価労働を持つ商品を生産するので、生きた労働に対する支配を媒介にして、8時間の労働生

産物パンが10時間の労働生産物を支配したことにもなる。マルクスとは別のスミスの余剰論である。

そして、この関係が成立するならば、余剰分の2個のパンは、資本家の得る実物の利潤であり、2時間の労働の成果である。この2時間の投下労働は、2個のパンなので、これを労働者の実物賃金とすれば、労働者の労働時間としては、2.5時間の労働を支配することができる。地代が入ってきてても事態は同じである。

この事例は、単一の企業をとったために、賃金も利潤も支配労働と比例関係を持っているが、企業が用いる生産手段と労働者の構成は、企業によって異なるので、一般的には、比例関係はない。ただし、社会全体としてみれば、投下労働と生みだされた生産物の量とその支配労働の量は、比例関係におかれる。投下労働とその生産物の支配労働の差が、余剰として利潤と地代になる。

### 3. 生産費説としての自然価格論

『国富論』の「第7章商品の自然価格と市場価格」の章は、市場価格による商品価格の現実的な動きと、それが収斂する重心としての自然価格が説明されている。

スミスは、賃金と利潤と地代のそれぞれに、需給の均衡状態を示す自然率があることを説く。そして、この自然率の合計を商品の自然価格 (natural price) と呼ぶ (*Ibid.*, p.72, 訳104頁)。「商品が通常売られる際の現実的な価格は市場価格と呼ばれ、これは自然価格以上にも、以下にも、全く同じにもなる」 (*Ibid.*, p.73, 105頁)、と言う。市場価格は、供給量と有効需要の割合によって決まり、日々変動することが説かれる。

ここでは、賃金・利潤・地代のそれぞれの自然率の合計としての自然価格は、労働価値論とどのような関係があるのかが問題となる。スミスは、商品の自然価格を「地代と労働と利潤の全体の価値 (whole value of the rent, labour, and profit)」 (p.73, 訳105頁)、としている。それぞれの要素の価値は、それぞれに労働者が行う現実の労働時間である支配労働によって測られる。この点で、スミスの自然価格論においても、自然価格を賃金・利潤・地代の自然率の合計とすることと労働価値論とは矛盾していない、と考えられていた。

資本家と地主のいない労働者だけの経済である初期未開の社会では、投下労働と支配労働は一致する。投下労働が交換の基準となる点で、交換のルールは分かりやすい。しかし、資本家と地主が登場し、利潤と地代が登場すると、投下労働は交換を規制するルールではなくなる。資本家の要求する利潤は、資本に対する平均利潤であって、労働とは比例しない。地代もまた土地の豊度や位置に基づくのであって、労働には比例しない。

文明社会では、利潤と賃金と地代の自然率の合計が、交換のルールとなる。スミスの場合、原料や道具などの生産手段の価値は、賃金・利潤・地代に遡及的に解消されるので、この3要素の合計としての自然価格は、費用価格に利潤を加えた生産価格である。

この自然価格論は、いわゆる生産費説であり、ビーバーと鹿の交換事例のような労働価値論とは異なるが、スミスは、この要素のそれぞれが支配労働を尺度に真実価値を持つと理解することで、労働価値論を維持していたと言える。

自然価格と市場価格が乖離した時は、どのように調整が取られるか。例えばスミスは、

供給量が有効需要に達しない場合には、市場価格は競争によって自然価格を上回り、逆の場合は逆に、供給量は有効需要に適合するようになる、と言う。

ただし、この調整プロセスには注意を要する。スミスは、供給量が有効需要を超え、市場価格が自然価格以上となった時、賃金・利潤・地代のうちのどれかが、自然率以下になる、と言う。そして、自然率以下になった要素が市場から引き揚げられることによって市場価格が自然価格に調整される、と考えるのである。(Ibid., p.74, 訳107頁)

つまり、3つの構成要素のいずれかにおける自然率からの乖離が、商品の市場価格からの自然価格の乖離と対応していると考えられている。リカードウは、労働価値に基づいて賃金・利潤相反説を説いているが、スミスが賃金・利潤相反説を説く場合は、資本の増加は、資本家間の競争を激化させることによって利潤を下げ、労働者への支払いの元本を増やすことによって賃金を上昇させる、という説明であり (Ibid., p.105, 訳157頁)、逆に賃金や利潤の上昇が、商品価格を上昇させる例も取り上げている (Ibid., p.113, 訳174頁)。

## 結 語

以上、見てきたように、アダム・スミスの労働価値論の思想と論理は、以下のように整理できる。

第1に、スミスにとって最も重要な概念は支配労働にある。分業と交換の社会では、自分の行った労働そのものではなく、支配労働が価値の尺度になる。それは、自分が行うべき労働を他人にさせる経済システムである。このことが労働価値論、すなわち等労働量交換の基礎になる。この意味で、富裕の尺度あ

るいは商品の交換価値の尺度は支配労働になる。

第2に、支配労働は、投下労働を前提とした概念である。それはスミスの表現としては、投下労働こそが本源的な購買貨幣であり、労働なくして何物も得られない、ということに基づいている。

第3に、支配労働は価値の真実の尺度であるが抽象的な概念で、いわば経済学上の概念であり、現実の尺度財にはなり得ない。金銀貨幣はそれ自身の価値が変動するので、貨幣の価値尺度は真実尺度ではなく名目尺度であるが、しかし、多くの人々にとって馴染みやすい自然な尺度である。

第4に、資本と土地所有者の登場によって、資本家は資本量に比例した利潤を求め、土地所有者は土地の豊度や位置に対する地代を求める。この2つは労働と比例しない要素であるが、価格の構成要素となる。商業社会は一般的にはこの状態にある。この問題には、リカードウの価値修正問題やマルクスの転形問題も含まれている。

第5に、こうした社会では、労働は唯一の交換の基準ではなくなる。労働者の付加した価値は、賃金と利潤と地代に分解され、3つの構成要素はそれぞれに自然率を持ち、それぞれに支配労働によって評価される。例えば8時間労働の生産物が労働者の10時間労働を支配することになる。このため、支配労働は投下労働よりも大きくなる。

第6に、スミスにあっては、原料や道具も遡及的に賃金、利潤、地代に分解されるので、賃金、利潤、地代の3つの構成要素の合計としての自然価格は、いわゆる生産費説(価格 = 費用価格 + 平均利潤)になる。自然価格論は投下労働 = 支配労働という意味での労働価

値論からの修正である。しかし、それぞれの要素が支配労働によって評価される点で、労働価値論は維持されている。

第7に、市場価格は自然価格から乖離するが、それは価格の3つの構成要素が自然率から乖離することになり、自然率から乖離した構成要素の需給関係が調整されることによって、市場価格は自然価格に向かって調整される。

以上である。

## 参考文献

- Bailey, Samuel [1967], *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*, 1825, rpt. Augustus M. Kelley. 『リカード価値論の批判』、鈴木鴻一郎訳、日本評論社、1948。  
[1837], *Money and its Vicissitudes in Value*, Effingham Wilson, London.
- Hollander, Samuel [1973], *The Economics of Adam Smith*, University of Toronto Press. 『アダム・スミスの経済学』、大野忠男訳、東洋経済新報社、1976。  
[1979], *The Economics of David Ricardo*, University of Toronto Press. 『リカードの経済学』、上、下、菱山泉、山下博訳、日本経済評論社、1998。  
[1987], *Classical Economics*, Basil Blackwell. 『古典派経済学』、千賀重義、服部正治、渡会勝義訳、多賀出版、1991。
- Locke, John [1963], *Works of John Locke*, Vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen.  
Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money, 1692. 『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978。  
Further Considerations concerning Raising the Value of Money, 1695. 『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978。
- Two Treatises of Government, 1690, *Works of John Locke*, Vol. 5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen. 『統治二論』加藤節訳、岩波文庫、2010。(Locke [1991], *Locke on Money*, W. Yolton, ed., Oxford University Press.)
- Malthus, Thomas Robert [2012], *Principles of Political Economy*, General Books. 1st. ed. 1820. 『経済学原理』、小林時三郎訳、岩波文庫、上、下、1968。
- Marx, Karl [1971], *Das Kapital, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 23-25. 『資本論』、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、第1-13分冊、1982-89。
- Mill, J. S. [1965], *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848, 7th ed. 1871, Collected Works, Vol. 2, Vol. 3, University of Toronto Press. 『経済学原理』、末永茂喜訳、岩波書店、全5分冊、1959-1963。
- Montesquieu, Charles Louis de Secondat [1900], *The Spirit of Laws*, rpt. Prometheus Books (*De l'Esprit des Lois*, 1748). 『法の精神』、野田良之他訳、岩波文庫、上、中、下、1989。
- Ricardo, David [1951], *On the Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge, University Press, Vol. 1. 『経済学および課税の原理』、『リカード全集』第1巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970。
- Sinha, Ajit [2010], *Theories of Value from Adam Smith to Piero Sraffa*, Routledge.
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Liberty Fund, in Dianapolis. 『国富論』、水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2001。
- Ricardo, David [1951a], *On the Principles of Political Economy and Taxation, Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge, University Press, Vol. 1. 『経済学

- および課税の原理』、『リカード全集』第1巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970。
- 大森郁夫 [1996]、『ステュアートとスミス』、ミネルヴァ書房。
- 奥山忠信 [1990]、『貨幣理論の形成と展開—価値形態論の理論史的考察』、社会評論社。
- [2011a]、『市場における貨幣量の役割—David Humeの貨幣論』、奥山・張編『現代社会における企業と市場』、所収。
- [2011b]、『アダム・スミスと貨幣数量説』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第11号。
- [2013]、『リカードの貨幣数量説と国立銀行設立試案』、『政策科学学会年報』、第3号。
- [2013]、『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望』、社会評論社。
- 越智良二 [1998]、『アダム・スミスの貨幣論の研究』、青葉図書。
- 島博保 [1980]、『スミス価値論の構造』、東北大学『研究年報経済学』、第41巻第4号。
- 星野彰男 [2005]、『『国富論』の基本命題：経済学史学会第69回大会報告』（2005年5月28日）
- 馬渡尚憲 [1989]、馬渡編『経済学の現在 ver3』、I - 2。
- [1997a]、『経済学史』、有斐閣。
- [1997b]、『J. S. ミルの経済学』、御茶の水書房。
- 渡辺恵一 [2010]、『スミス労働価値論の再読』、大阪経済大学『大阪経大論集』、第61巻第1号。